

一 つ の 補 筆

——比較文学への試み(1)——

小 川 正 巳

『文学の基礎理論——ドイツ文学の座標から——』という本のために、私はその一部として「比較文学的方法」を書いた。『クセジュ』の『比較文学』を中心に、バルダンスペルジュ、「一般文学」(*littérature générale*)を唱えるヴァン・ティーゲム等フランス学派に対して、等しく比較文学者であるアメリカのルネ・ウェレックの比較文学に対する批判(*The Crisis of Comparative Literature*)を対置させた。フランス、アメリカに対して、ドイツにおいては比較文学は今までのところ見るべきものはなく、むしろウェレックも指摘しているように、カール・フォスラー、エーリッヒ・アウエルバッハ、E. R. クルツィウなどのロマニストがその役を果していると言うべきなので、⁽¹⁾アウエルバッハの『ミメーシス』とクルツィウスの紹介を行なった。クルツィウスはその主著『ヨーロッパ文学とラテン中世』を中心に紹介したわけであるが、紙数の関係でどうしても書いておきたいと思った附記を加えることができなかったので、その附記を少し拡大してここに「補筆」として書いておこうと思う。クルツィウスの上述の本についての詳細はここでは目的ではないので、次のことだけ述べておく、すなわちこの膨大な本の出生の由来は第18章『エピローグ』の1、『回顧』のところに明白に語られている、「たとえば『老人のような少年』のトポスに私が気づいたのは、グレゴリウスが聖ベネディクトゥスを形容したものについてであった。この表現は人目をひくもの

(1) なおDDRにおける比較文学が等しくロマニストの Werner Kraus、かれの弟子の Claus Träger につがれていること、さらには *typologisch* な研究方法をとっているソ連の比較文学は、私にとってはこれから果さねばならない未来の課題である。

だった。しかしそれ以前だれの目もひかなかった。このトポスは時代をさかのぼってはシリウス・イタリクスと小プリニウスにまで、また時代をくだってはゴンゴラまで追跡することができた。これは一つの特異なケースであつたらうか？ それとも他のトポスについても同様のながい生命を探索することができたのだろうか？——こうして歴史的トポスの研究という課題が生れた。そしてこのことから古代の修辞学が問題になった⁽²⁾。そして修辞学を重要な一学科とする *artes liberales* は久しくヨーロッパの教育体系をなしていた。修辞学で用いられる「老人のような少年」といったトポスが通用する世界をクルツィウスは「ラテン中世」と名付け、それはダンテを頂天として、ホメロスから、修辞学を評価したゲーテに及んでいるとする。第一章『ヨーロッパ文学』の結びは次のような言葉である、「ヨーロッパ文学の『創始の英雄』(heros ktisres) はホメロスである。そしてその最後の世界的作家はゲーテである。彼がドイツにとって意味するものをホフマンスタールは次の二つの文章で述べた。すなわち『ゲーテは教養の基礎として全文化に代わりうる』。また、『われわれは近代文学なるものをもたない。われわれのもつものはゲーテと、いくつかの端緒めいたものである』。これはゲーテ死後ドイツ文学に下されたもっとも重大な判決である。しかしヴァレリーもまた辛辣にいつている、*le moderne se contente de peu* [近代人はわずかのもので満足する]。19世紀と20世紀初期のヨーロッパ文学はいまだ選別されていない。死せるものと生けるものが区別されていない⁽³⁾」。

私の補筆はここから始まる。構造主義の人類学者クロード・レヴィ＝ストロースが、ジョルジュ・ジャルボニエを相手にして、1959年10月から12月までに行なったテレビ放送の対談を集録した本『レヴィ＝ストロースとの対話⁽⁴⁾』において、ジャポニエは民族学者が研究対象にしている社会(未開社会)

(2) E. R. Curtius: *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*. Francke Verlag 1948, S. 385

(3) *ibid.* S. 25f.

(4) George Charbonnier: *Entretiens avec Claude Lévi-Strauss. Les lettres nouvelles* 10. Librairie Plon et Ed. Julliard, 1951 (詩人多田智満子さんの訳本を読んで、私はこの

と、私たちが生きている社会（近代社会）との「機能上、構造上の基本的な差異」を質問している。この質問はレヴィ＝ストロースを困惑させる。なぜ困惑させるかと言うと、レヴィ＝ストロースもそこで言っているように、「一つの社会を外側から見るのと内側から見るのとは全然別だという事実から大きな困難が生じているようです。外側から見る場合、いくつかの指数でその社会を言い表わすことができます。その技術的発達の程度、物質的生産量、人口の実数等々を測定し、それからきわめて冷静に、その社会にひとつの註をつけ、多種多様な社会に付した様々な註を比較することができます。しかしその社会の内部に入ってみますと、これら二、三の貧弱な要素が、それがどんな社会であろうと、その社会の個々の成員にとっては、ひきのばされ、変化したものとなります。最も文明的な社会であろうと、最も原始的な社会であろうと、それは重要ではありません。とにかくその社会はあらゆる種類の陰翳に富んでいるのです⁽⁵⁾」。つまり民俗学者レヴィ＝ストロースは自らは近代社会の内側に生きながら、「外側から」未開社会を見るわけである。従ってかれ自身の生きている近代社会との相異をたずねられることは、謂わば専門以外のことにかかわる質問であるだけに困惑したわけである。だがこの「外側から見る」(regarder du dehors)ということは構造主義の一つの重要な特性ではないか。構造主義の原点、構造主義言語学のアメリカを代表するブルームフィールド学派も白人が減びゆくインディアンの言語を「外側から見て」これを記述する必要から生れたと言っているのではないか。ジェラルド・ジュネットも『構造主義と文芸学』において、構造主義は主題分析につきまとうレットルはりに対しては内在的批評の援助になりうるかも知れないが、このような内在的批評が及ぶのは、内在的に追体験しうる限られた範囲にすぎないことを述べて、次のように言っている、「それによれば文学を二つの領

文章で述べる二つの臆説を抱くに到った。その意味ではこの文章は多田智満子さんに負うと言って過言ではない。この文章を書くに際して、原書のコピーをお借りした。この場所をかりて謝意を表す。

(5) *ibid.* p. 26-27

域に分割することが想像されうる、『生きた』文学，すなわち批評的意識によって追体験されるに適した文学は，解釈学的文芸学にとっておかねばならないだろう，リケールが⁽⁶⁾要求している汲みつくせぬ，絶えず現在する豊かな感覚が与えられるユダヤ及びギリシヤの伝統領域のように。それに加わるのが、『死んで』はいないが，ある程度遠くて，解説困難な文学の領域であって，そのような文学の失われた意味は，例えば民俗学者専用の領域であるトーテム文化のように，構造的思考の操作によってのみ⁽⁷⁾解明されうる。そしてジュネットは後者の方法が適用される範囲が前者の領域よりはるかに大きいことを指摘し，「時間的空間的に遠い文学，幼児及び民衆の文学，さらにそれに含まれるものとしては，文芸学から絶えず見棄てられ，しかもそれがただたんにアカデミックな先入心からだけでなく，その研究においていかなる主体相互的な参与も呼びおこしたり導いたりすることができなかった理由による，メロドラマとかフイユトン小説のような最新の形式⁽⁸⁾」をあげている。私はロシア・フォルマリストの一人V. シクロフスキーがその『散文の理論』において無名の作家に注目しているのを指摘しておこう。⁽⁹⁾ジュネットは最後にこうまで言っている，「特定の，公式に聖化された作品，コルネイユの作品のように実は私たちにとってははるかに無縁となったものは，もしかしたらこの距離と無縁の言語で私たちによりよく話しかけるかも知れない，それらの作品に相も変わらず固執的に——そして時に全く無駄に——課している偽わりの親近性の言語でよりも⁽¹⁰⁾」。つまり所謂内在的批評の及ぶと称する範囲に

(6) 訳者註。Ricœur, P.: Structure et Herméneutique.

(7) Gérard Genette: Structuralisme et critique littéraire, Figures I, Paris 1966; von Höhnisch übersetzt.—In: Strukturalismus in der Literaturwissenschaft. Neue Wissenschaftl. Bibliothek 43. Kiepenheuer & Witsch 1972. S. 79f. (同書の81頁の註にレヴィ=ストロースの『野生の思考』(La Pensée sauvage) から次のような言葉が引用されている，「構造は外側から接近する観察者にもみその姿をあらわす。…」

(8) ibid. S. 80

(9) V. シクロフスキー，水野忠夫訳『散文の理論』せりか書房（特に最後の『「主題」をはなれた文学』）

(10) ibid. S. 30

も、この「外側からの接近」の方法をすすめているわけである。

いずれにしてもレヴィ＝ストロースは上述の『対話』でシャルボニエの巧みな誘導訊問にさそわれて、専門とする民俗学によって「外側から接近」してきた未開社会と、かれ自身が生きている近代社会との相違を次のように述べるに到っている、「全体として見れば、社会は少しばかり機械に似ていて、それには二つの大きな型があることが分ります。工学的機械と熱力学的機械とです。前者は、最初に与えられたエネルギーを用いて、もし非常にうまく組み立てられていれば、もし摩擦や過熱が全然なければ、出発点に与えられた最初のエネルギーでもって理論的には際限なしに作動することができようという機械です。一方、蒸気機関のような熱力学的機械は、その諸部分、つまり汽罐と凝縮器との温度の差によって作動します。これは時計的機械よりずっと大きな働きをしますが、しかしそのエネルギーを費いやしながら、次第にエネルギーを消尽してしまうのです⁽¹¹⁾」。したがってレヴィ＝ストロースは近代社会を「熱い」社会 (*des sociétés «chaudes»*)、未開社会を「冷たい」社会 (*des sociétés «froides»*) と呼んでいる。さらにかれの研究対象である未開社会をこうも説明している、「それは物理学者が『エントロピー』と呼ぶところのあの混乱を極くわずかしか生じない社会であって、どこまでもはじめの状態の中に自分を保とうとする傾向をもっています。だから私たちはそういう社会が歴史も進歩もないように見えるわけです⁽¹²⁾」。そしてレヴィ＝ストロースはこの所謂「冷たい」未開社会と「熱い」近代社会との相違のよってきたるところを次のように説明している、すなわち未開社会はその構成員の「満場一致」(*unanime*)の努力に基いているのに対して、近代社会は「作動するポテンシャル・エネルギーの差を利用するわけで、その差は社会階級の様々な形態によって実現⁽¹³⁾」される。先にも述べたように『構造的人類学』の著者が、シャルボニエの巧みな誘導訊問にさそわれて、その専門の領域を

(11) *ibid.* pp. 37-38

(12) *ibid.* p. 38.

(13) *ibid.* p. 38

はなれて、不馴れな近代社会を論ぜさせられるのを読んで、私もかれの所論から臆説を抱くに到った。レヴィ=ストロースの近代社会は勿論そこでかれが言っている「社会の内部の不均衡」をつくり出すに到ったものとして奴隷制とか農奴制などが指摘されている以上、西洋の古代、中世も含まれたものと理解されるわけであるが、私の第一の臆説は少なくとも教養世界に関して言えば、*artes liberales* の、修辞学に支えられたトポスが通用することをクルツィウスが証明したホメロスからゲーテまでのラテン中世と名付けられるヨーロッパ社会は、丁度神話が通用した未開社会と同様にある意味において「冷たい」社会、「エントロピー」が極くわずかしか生じない社会と言えないだろうかということである。そしてその際の所謂未開社会の「満場一致」は、古代没落、封建制の誕生と没落、絶対主義の確立等の変動にもかかわらずキリスト教によってなされたとは言えないか。クルツィウスの『ヨーロッパ文学とラテン中世』は古代教養とキリスト教の融合という壮大なドラマの証明であると言えよう。そしてそのラテン中世はゲーテの死とともに閉じられたとする。事実ゲーテの死後間もなくニーチェは「神は死んだ」としめくくっている。その意味でジェラルド・ジュネットはリケールとともに、西洋人にとっては「ユダヤ及びギリシャの伝統領域」は内在的批評の対象領域としたが、クルツィウスはホメロスからゲーテに到るラテン中世は、近代ヨーロッパ人にとっては『死んで』いないが、ある程度遠くて、解読困難な文学の領域であって、そのような文学の失われた意味は……構造的思考の操作によってのみ解明しうる」とものと暗黙のうちに考えていたと言えよう。クルツィウスが、レヴィ=ストロースが言う「外側から見て」、「いくつかの指数でその社会を言い表わした」のが、上述のトポスであると言えよう。教養世界に関するかぎり「近代社会」に関するかれの発言は、上述のホフマンスタールの言葉、「われわれは近代文学をもたない。われわれのもつのはゲーテと、いくつかの端緒めいたものである」にこめられている。それはラテン中世への哀悼の言葉であるとともに、近代文学への次の発足の言葉と重なる、「(近代文学

に関して) 決定的なことをもつのは文学史ではなくて文学批評である。それはドイツのわれわれはフリードリッヒ・シュレーゲルと——いくつかの端緒めいたものをもっている⁽¹⁴⁾。そしてかれ自身失われたヨーロッパの回復を求めて、『ヨーロッパ文学に関する批評的エッセイ』⁽¹⁵⁾において活発な批評活動(ジュネットの謂う内在的批評)を行なった。しかし『ヨーロッパ文学とラテン中世』という主著においてクルツィウスがヨーロッパの過去に見出した、ホメロスからゲーテに到る「ラテン中世」は謂わば澱んだ巨大な沼と言えよう、ヨーロッパの過去のほぼ三千年の間の無数の文学的支流はそこに注ぎこんでいることを私たちは知らされる。しかしそれはもはや終焉した沼であって、かれの活発な批評活動にもかかわらず、そこからはヨーロッパの、さらに世界の明日へのいかなる流れをももたない。

第二の臆説に移ろう。もしヨーロッパ社会も、クルツィウスの謂うラテン中世が支配している限り、レヴィ=ストロースの謂う「冷たい」社会だとすれば、「熱い」社会、「時計的機械よりずっと大きな働きをしますが、しかしそのエネルギーを費いやしながら、次第にエネルギーを消尽してしまう」、「歴史と進歩」をもつ近代社会はいつ始まったと言えるだろうか。勿論クルツィウスといえども、ゲーテを最後の世界的作家と言ったのは、ラテン中世がそこまでたどれるというだけであって、13世紀のスコラ哲学の擡頭とともにすでに artes に基くラテン中世の後退を告げている⁽¹⁶⁾。そして後退したラテン中世が最後に開花するのは、ピレネーのむこうの後進国スペインの『黄金時代』(siglo de oro) であるとしている。私は近代社会の始まりは問わないが、少なくともその意識化はローマン派において始められたとしたい。ルネ・ウエレックはその『文学史におけるロマンチズムの概念』⁽¹⁷⁾において、O. ラヴジョイの意見に反対して、ロマンチック運動が汎ヨーロッパ的現象である

(14) *ibid.* S. 25f.

(15) E. R. Curtius: *Kritische Essays zur europäischen Literatur*. Franke Verlag 1950.

(16) 『ヨーロッパ文学とラテン中世』の第3章6, 大学参照。

(17) René Wellek: *The Concept of Romanticism in Literary History*. In: *Concepts of Criticism*. Yale University Press. 1963.

ことを立証しようとしている。しかしその立証過程において常にドイツのロマンチズムが「他国にまさって完全な勝利」をおさめたこと、すなわちこの期のドイツ文学がフランス革命とならんで、圧倒的に他のヨーロッパ諸国に影響を与えたとしている。そしてウェレックはこのドイツ・ローマン派の「他国にまさって完全な勝利」の歴史的理⁽¹⁸⁾由として、次のように言っている、「ドイツ啓蒙主義は微弱で永つづきがしなかった。産業革命は遅れておとずれた。派生的でオリジナリティのない啓蒙主義も特に厳格な宗教的正統派も不充分に見えた。このような社会的知的諸原因は文学に道を開いたが、その文学はほとんど無階級的知識人や……教師や封建主義にも中産階級の理想にも反抗する連中によって創りだされた。ドイツのロマンチズムはイギリスやフランスのロマンチズムにまして、その階級的結びつきを解き、その故に日常的な現実や社会的関心から遠くはなれた文学を創りだすのに特に適した知識階級の運動であつた」。ウェレックがロマンチズムに重点をおいているのに対して、啓蒙主義に重点をおくマルクス主義者ジョルジ・ルカーチはその同じ現象をさらに一歩進めて次のように説明する、「……もっともそれらはいわば雲の中で、政治的、社会的実践から切り離された純粹思想と文学の領域でおこなわれた。……しかしそれは時として——まさにこの社会的に真空なイデオロギ⁽¹⁹⁾ー的空間の無抵抗を利用して、より進歩したかれらの手本

(訳者註、イギリス、フランス)を超えて、とことんまで考え (Zuendedenken), 先の先まで形成 (Weitergestalten) することを許した」。ドイツ・ローマン派のイェナを中心とした所謂前期は、その理論的中心であつたフリードリッヒ・シュレーゲルの『ポエジーに関する対話』(1800)が示すように、そこにつどうものはシュレーゲル兄弟のような文学者だけではなくて、シュライエルマッヒャーのような神学者、さらにフィヒテ、シェリングのような哲学者が想定される。さらに『ヒュペリオン』を書いたヘルダーリンの、哲

(18) *ibid.* p. 167.

(19) Georg Lukács: *Skizze einer Geschichte der deutschen Literatur*. Luchterhand 1964. S. 33

学者シュリングとヘーゲルとの交遊。すなわちドイツ・ローマン派と、カントに始まってフィヒテ、シュリング、ヘーゲルに到るドイツ観念論哲学は同じ基盤にあったと言えよう。フランス革命はあきらかにヨーロッパに古いものの没落と新しいものの登場を告げた。ドイツ・ローマン派とドイツ観念論哲学の共通の基礎はそのような新しく登場したものの影響下に、上述のような後進国ドイツ独特の形態をとって発生したと言えよう。フリードリッヒ・シュレーゲルは『ギリシャのポエジーの研究について』（1795）において「古いもの」の完結を述べるとともに、自分たちが立っている「新しいもの」の定義づけを行なおうとした。かれは「新しい」文学のさまざまな定義づけを、有名な「進歩的普遍的ポエジー」に要約している。古い数学的客観性に対して、主体的認識論（カント、フィヒテ）を媒介とした新しい弁証法的客観性がシュリング、ヘーゲルによって打ちたてられた。そしてそれはヘーゲルにおいて歴史の弁証法的把握に到る。こうして「歴史的」視点は19世紀のほとんどすべての学問の原理となった。フリードリッヒ・シュレーゲルは『インド人の言語と知恵』（1808）においてサンスクリットとヨーロッパの言語の類似に驚き、言語の、そして人間の「進歩性、普遍性」の証しとする。ここにグリム兄弟等によって以後発展させられた歴史的比較言語学の発端がある。

レヴィストロースの謂う「エネルギーを費いやりながら、次第にエネルギーを消尽してしまう」、**「歴史と進歩」**の近代社会は、このようにしてローマン派によって始めて「歴史」として意識されたわけであるが、「社会的に真空なイデオロギー的空間の無抵抗を利用して、……とことんまで考えて」得られたこのような視点はその観念性の故にもう一度「社会」に則して再意識化されねばならなかった。それがマルクスの「ヘーゲルの転倒」である。マルクスによってヘーゲルは転倒されても、「歴史」の観念は生きつづける。ヘーゲルを転倒したマルクスは近代社会をさらに正確に次のように定義づける、**「ブルジョアジーは生産の道具を、つまり生産の諸関係を、つまり社会的全**

体の諸関係を絶えず変革することなしには存続できない⁽²⁰⁾。そしてこの資本主義に宿命づけられたこの「絶えず変革すること」が進歩として未来を薔薇色にそめたのはそう永くはなかった。19世紀の後半にはすでに「進歩」に対する呪咀の声を聞くことができる。随意にひろってみても、たとえばフローベルの晩年の作品『ブヴァールとペキュシュ』において「ブヴァールは考える。——何？ 進歩だと。なんとという大口叩きだ。更につけ加える。——それに政治だと？ とんだ汚職だ」（田木繁訳）。1873年にランポーは『地獄の季節』のなかで「そら科学だ。どいつもこいつも又飛び付いた。肉体の為にも魂の為にも、——臨終の聖餐——医学もあれば哲学もある、——たかだか万病の妙案と恰好を付けた俗謡さ。それに王子様等の慰めか、それとも御法度の戯れか、やれ地理学、やれ天文学、機械学、化学……／科学。新貴族。進歩。世界は進む。何故逆戻りはいけないのだらう」（小林秀雄訳）。1899年から1939年まで個人新聞『ファッケル』で「進歩」を主要な敵として戦いつづけたオーストリアのパロディスト、カール・クラウス。資本主義が集注した「都市」就中パリに異常な興味をおぼえ、その後半生、未完のライフ・ワーク『パリの路地』を書きつづけたヴァルター・ベンヤミン。かれの未完のライフ・ワークのための断片を私たちは読むことができる。『パリの路地』の中心テーマはボードレールになる予定であったらしい。このボードレール論も未完のままであるが、1939年に書かれた『複製技術時代の芸術』においてアウラをもつ職人の世界、すなわち完成することによって制作者の痕跡をとどめている職人の世界が次第にパノラマ、写真、新聞、映画、トーキーといった複製芸術に進歩してゆく様が述べられているが、そしてそれは芸術の世界での「冷たい」社会から「熱い」社会へ進歩してゆくと言えようが、ベンヤミンはボードレールをそのような進歩する「パリを抒情詩の対象⁽²¹⁾」とし

(20) K. Marx und F. Engels: Manifest der kommunistischen Partei. M. E. Werke. Bd. 4. S. 465

(21), (22), (23), (24) Walter Benjamin: Paris, die Hauptstadt des XIX. Jahrhunderts. V. Baudelaire oder die Straßen von Paris. In: Illuminationen. Suhrkamp 1961. S. 194f.

た詩人であるとする。この遊民ボードレールは「まだ闕のうえ、大都会と市民階級との闕のうえにたっている」⁽²²⁾。この遊民は「群集のなかに避難所をさがす」⁽²³⁾。この遊民は群集をとおしてパリを見る。その視線は「この都市にむけられたアレゴリカーの視線であり、疎外されたものの視線である」⁽²⁴⁾。ベンヤミンはこの「闕のうえ」という考えを『パリ——19世紀の首都』の総括でも再び述べている。「技師の構成としての建築が発端をなす。写真による自然再生がそれに続く、想像力の創造は商業美術として実用化の用意をする。文学はモンタージュ風のフイユトンに屈服する。これらの生産物はすべて商品として市場に姿をあらわそうとする。しかしそれらはまだ闕のうえで躊躇していた。路地と室内、博覧会とパノラマはこのような時代から生れたのだ。それらは夢の世界の残存物であった」⁽²⁵⁾。後進国ドイツで、クルツィウスの謂う「最後の世界的作家」ゲーテは1847年に死んでいる。真の意味での「熱い」社会はフランスではすでに1789年に始まってはいたが、ベンヤミンはボードレール文学についてさらに、『悪の華』の有名な詩『旅』にふれて、こう言っている、「遊民の最後の旅は死である。旅の目標は新しさである。『新しいものを見出すために未知なるものの底へ』(Au fond de l'inconnu pour trouver de nouveau)。新しいものは商品の価値から独立した質である。それは集団的無意識が生み出す様々な形像に譲渡できない仮像の根源である。それは飽くことのない代理人の流行であるところの間違った意識の精髓である」⁽²⁶⁾。マルクスが言う「絶えず変革することなしに存続できない社会」は、ベンヤミンの表現、「目標は新しさ」、「飽くことのない代理人が流行」であるとともに、その「最後の旅が死」であり、「仮像の根源」であり、「間違った意識の精髓である」に重なるであろう。その社会においてはやはりマルクスが『共産党宣言』で言っているように、「その生産品に対する絶えず広がってゆく販売の必要はブルジョワジーを全世界中に駆りたてる」⁽²⁷⁾。「要するにブルジョワジー

(25) *ibid.* S. 200f.

(26) *ibid.* S. 196

(27) *ibid.* S. 465

は世界を自分自身の像にかたどって創る⁽²⁸⁾。つまりヨーロッパに発した「熱い」社会は、その熱装置の作動によって今や世界に拡大されたと言うことである。

1916年にF. ド・ソシュールはその『一般言語学講義』において、言語学的にローマン派によって意識化され発展させられた「歴史」概念にストップをかけた。すなわち歴史的比較言語学の「通時性」に対して、「共時性」を対置させた。ソシュールのこの「共時性」の提唱がいかなる背景によってなされたかは知らないが、第一次大戦を中心にしてヨーロッパの潮流が、前世紀の歴史主義、実証主義に対して大きく変化したことはたしかだ。私たちはその変化をベルグソンとクローチェの名を挙げることによって言いあらわすことができると思う。とにかくローマン派によって意識化された「通時性」が19世紀のほとんどすべての学問の視点になったように、ソシュールによって提唱された「共時性」視点は、構造主義の名のもとに今や多くの学問のなかに滲透しつつあるようである。既に述べたようにアメリカの生成文法は、ソシュールとは別に、従来の通時的印欧語の研究方法では役に立たないインディアンの言語を記述するという実用的課題から生れている。ちなみに『アメリカ・インディアン語便覧』が出版されたのは1911年である。構造主義がアメリカではそのように実用的課題から生れたように、ロシアでは特に文学の構造主義的先駆がロシア革命のなかから生れた。ペトログラードの『オポヤズ』（詩的言語研究会）——1917年設立——を中心とした所謂ロシア・フォルマリズムの連中である。ウェレックはこう言っている、「かれらは革命的雰囲気
のなかに育った、この雰囲気はラディカルに過去を、芸術においてすら拒絶した。かれらの同盟者は未来派の詩人たちであった。同時代のマルクス主義的批評においては芸術はすべての自主性を失っていて、社会的、さらには経済的変化の受身的な反映に帰せられた。これはフォルマリストたちの受け入れうるところではなかった。しかしかれらはヘーゲルのエヴォリューション

(28) *ibid.* S. 466

観は受け入れることができた、それは古いものは新しいものに、また反対に新しいものは古いものにとというその内在的、弁証法的变化の基本原理である。かれらはこれを文学に拡大解釈して、詩的因習の『自動化』のすり切れ、次いでそのような因習の、ラディカルに新しく反対の動きを利用する新しい運動による『現実化』とした。新しさこそ価値の唯一の基準となった⁽²⁹⁾。このフォルマリストの見解は、主としてローマン・ヤコブソンによって、チェコスロヴァキアに移されて、そこでプラグ学派の誕生を見る。そしてその見解を「最も意識的に文学的エヴォリューションの問題に適応したのはヤン・ムカジョフスキであった」。ウェレックは「芸術作品は、その先行する時代の構造を再構成するとき、積極的価値を発揮し、その構造を変えることなく踏襲するなら否定的価値となるだろう」というムカジョフスキの言葉を引いて、かれが「個々の作品を力学的エヴォリューションとの関係において評価した⁽³⁰⁾」とする。すなわちムカジョフスキは「文学史は、諸要素の連続的な入替えであり、それら諸要素の変化形として、詩的構造を絶えざる運動において見なければならぬ⁽³¹⁾」とする。ロシア・フォルマリズムは三十年代になると社会主義リアリズム理論によって圧殺されるが、やがて構造主義の登場とともに、その先駆性は再評価されるとともに、第二の生を享受しつつあると言えよう。フランスの『テル・ケル』コレクションで1966年に『文学の理論』という標題でロシア・フォルマリズムの編集を行なっているT. トドロフが、1968年の『テル・ケル』誌(35号)の「現代ソヴィエトにおけるセミオロジー」特集に書いた『フォルマリストと未来派』という文章を、『文学の理論』の訳者野村英夫氏が訳書のあとがきに紹介している。「フォルマリストたちが、ほかの批評家たちとは反対に、忘却をまぬがれて生き残ったのは、彼らが真の批評家ではなかったからではないかというのである。

(29) R. Wellek: The Concept of Evolution in Literary History. In: Concept of Criticism.

p. 48 (私たちはここでマヤコフスキに代表される左翼未来派芸術家とロシア・フォルマリズムの学者が『レフ』誌において共有した過去=歴史へのラディカルな拒否を思いおこそう)。

(30) ibid. p. 48

(31) ibid. p. 49

今日とりわけフォルマリストたちが評価されているのは、彼らが文学という学問（科学）の創始者、あるいは少なくとも先駆者だったという点においてである。（中略）つまり、《言語学的な批評》から出発して、文学的な言語表現というものの規定へ、そしてさらにそこからその学問あるいは科学へと導いていく経路は、まだ完全に辿られたとはいえない。しかしながら、彼らは、その主要論文において、分析の出発点となった個人的な作品というものを超えており、そこから、本来的な意味において理論的な諸問題へと到達しているのである。（中略）事情が今日においても——とくにフランスにおいて——全く同じであり、『構造的な詩学はあらゆる文学的な対象に対して有効である』……『文学的な考察の段階においては、対象を創り出すのは方法⁽³²⁾なのであって、その逆ではない』。

構造主義人類学者レヴィ＝ストロースが未開社会という「冷たい」社会を見る「冷たい」視線を、対談者シャルボニエによって、レヴィ＝ストロースも生きている「熱い」近代社会に注ぐように誘導されて困惑したことは既に述べた。しかしアメリカの生成文法は、謂わば「冷たい」インディアン社会を見る「冷たい」視線を、困惑することなく「熱い」近代社会の言語にも注ぐことによって成立していると言っているのではないか。既に述べたジェラルド・ジュネットが文学的方法において、内在的批評（熱い視線）の及ぶ範囲にまで「外側からの接近」（冷たい視線で見ること）をすすめているのと同じことではないか。革命によって過去を断絶したロシア・フォルマリストたちの視線も「冷た」かった。だからこそかれらの文学研究は現在の構造主義者たちによって「科学」として評価されているのだ。すなわち構造主義が今や多くの学間に滲透しつつあるということは、「冷たい」視線が今や所謂「熱い」と称する私たちの生きている世界に、「通時性」という幻想をおしつけて、注がれようとしていることではないか。というよりは世界に注がれる視線が「冷た」くなったということは、今までにたびたびおこったイズムの

(32) *Théorie de la littérature*, collection Tel Quel. 1965 ツヴェタン・トドロフ編 / 野村英夫訳『文学の理論』理想社300—301頁。

交替ではなくて、そのような「冷たい」視線を発生させた世界が「冷た」くなったということではないだろうか。ヨーロッパに発した「熱い」社会は、その熱装置の作動、つまりレヴィ＝ストロースの言う「社会の内部の不均衡」に従って今や世界に拡大されたわけであるが、世界に拡大されることによって一種の飽和、再びレヴィ＝ストロースの言葉をかりれば、もはやエントロピーをつくり出さない状態、すなわち「冷たい」社会ではなくて、「冷たい」世界になったのではないか。勿論私は現代世界に存する資本主義体制と社会主義体制、南と北との不均衡に眼をつぶるわけではない。それにもかかわらず「熱い」社会特有の「歴史と進歩」が破綻した人類は今や暗黒の未来を背にして、自分自身が乗っている地球に「冷たい」視線を注ぐことによって、その「構造が姿をあらわす」のを待ちうけているように思える。

ヘーゲルは転倒させたが、「歴史」の観念の生きつづけているマルクス。そのマルクスの史的弁証法を実現させた社会主義諸国が、その「歴史と進歩」による困難な実験過程においても必ずしも「希望」的でないことも、人類が背にしている暗黒の未来と無関係であるとは言えまい。現代のマルクス主義の深い分裂傾向は、たんに政治的实践のうえだけではない。「共時性」に重点をおく構造主義は、本来「通時的」なるべきマルクス主義理論にも、他の学問同様に滲透している。リュシアン・セバーク (《Marxisme et Structuralisme》1964。田村倅訳、『マルクス主義と構造主義』人文選書22)、ルイ・アルチュセール (《Pour Marx》1967、河野健二、田村倅訳、『甦えるマルクス』人文選書10、11) にその傾向が見られる。アルチュセールは同書において、1845年、『ドイツ・イデオロギー』を書いたマルクスを「認識論上の切断」(coupure épistémologique) として、それ以前のマルクスをイデオロギーの影響下にあったものとし、この「切断」とともにマルクスの「科学」が始まるとする。アルチュセールの所論のもう一つ重要なテーマは、マルクスのこの「科学」が、さらにヘーゲルの弁証法が「単一の内的原理」であるのに対して「諸矛盾の『集積』の『融合』」という構造的差異をもっているというこ

と、そしてこの矛盾は原理的に言って重層的に決定される (surdétermination) ということである。この重層的決定は従来考えられていた上部構造と下部構造との関係にも疑問を呈出することになる。一般に言って、本来「通時的」なるべきマルクス主義はそれがムカジョフスキーなどの文学研究であろうと、⁽³³⁾ アルチュセールの哲学研究であろうと、「通時的」な弁証法の回復は否めない。しかしその弁証法の回復はあくまで「共時性」という大前提のもとで、従ってその範囲のなかで行なわれていると言えないか。

暗黒の未来を背にして、人類がいつしか到達した「冷たい」世界は、未開社会が「全員一致」によって「冷たい」社会であったのに対して、何ものかによって「全員一致」させられることによって、つまり主導権が人間の手にない受働的な「全員一致」によって「冷たい」のではないか。従って今や人間はまず外的、歴史的な条件による解釈、イデオロギー等が侵入することを「切断」する。たしかに今までは、例えば文学研究において実証主義や機械的唯物論は文学の意味を作品の外にあるカテゴリーに還元してきたし、またアルチュセールが言うように、科学へのイデオロギーの侵入がマルクスの科学を科学たらしめなかった。ついでそのように「切断」された内部にむかって (内在的批評)、さらに深部にむかって (例えば変形文法の deep structure)、 「冷たい」視線をそそぎこむことによって、内部に、深部にひそむ構造をとらえようとする。この「科学」は「切断」された内部に対して、さらに深部に対しては、かぎりなく開いている。この「科学」が一步一步仮設を足場にしておりてゆく内部、さらに深部は、だが何に対して一体開かれているのだろうか。それは結局言語学や民俗学や詩学や哲学といった個別科学をこえて、「人間とは何か」を問うているのではないか。深部においては、人間共通の原理が把握できるという確信をいだいて。つまり人間は今、人間を問うてい

(33) ムカジョフスキーの「構造」は「……各部分の相互関係による全体的統一に基くものである。そして単に一致との調和というポジティブな関係にあっただけでなく、矛盾と葛藤による統一でもある。つまりロシア・フォルマリズムと比べた場合、矛盾と葛藤による統一という弁証法的概念になっていることが大きな特色である」。平井正、『ドイツ文学』48, 8頁

るのではないか、「科学」的に。そして「冷たい」世界となった今、人間は暗黒の未来を背にして、つまり時間をせきとめて、人間の内部に、さらに深部にむかって、「科学」的におりてゆきつつあるのは、そのようにしてつきとめられた「人間」に立脚して、今人間に「全員一致」を強いているなにかから自らを解放して、能動的に生きてゆくためではないか。アルチュセールは訳本『甦えるマルクスⅠ』の冒頭の『日本の読者へ』という文章を二つの自己批判で結んでいる。その一つは「マルクス＝レーニンの伝統のなかできわめて大きな役割をはたしている『理論と実践』の問題」に関する沈黙である。もう一つは「哲学の政治との有機的關係」に関する沈黙である。著者は「これら二つの重要な問題」を今後の課題とすることを読者に約束している。⁽³⁴⁾

(34) 同書14頁—16頁